



## 山頂から絶景を眺める日を目指して

学校長 横山 豊

人類の歴史に残る新型コロナウイルスとの戦いは依然続いています。何とか今年度の終わりを迎えられそうです。これも生徒の皆さんと保護者の皆さま、そして学校職員のすべての方々の理解と協力のおかげです。心から感謝の意を表します。ありがとうございました。

さて、今回の話は私の初めての登山体験についてです。それは、本校に勤め始めて2年目のことでした。当時、本校の図書館の主催で、夏季休業中に「図書館文学散歩」と「生徒会登山」という2つの行事が行われていました。その年の「文学散歩」の内容は飛騨高山の町の散策であり、「登山」は槍ヶ岳でした。私は、当時顧問を務めていたバドミントン部の活動以外に、とりわけ予定らしい予定もなかったもので、図書館の館長に誘われるがままに生徒会登山のパーティーに加わり、生徒、先生合わせて30名で槍ヶ岳に登ることとなりました。



ルートは槍ヶ岳コースで、長野県の上高地から北に少し離れたところにある徳沢キャンプ場で1泊。翌朝、標高3,080mにある山荘まで登り、そこで2泊目。そして翌早朝、さらに100m登り槍ヶ岳の山頂である槍穂(やりほ)にアタックするという2泊3日の計画でした。初日はバスで一路、上高地へ向かい、そこから3、4時間ほど歩いて徳沢キャンプ場に到着。そこでテントを張り、野営をしました。2日目は、日の出とともに起床。朝食も早々に済ませ、山道を登り始めました。休憩を挟みながら6時間、足を進め続けました。岩場に差し掛かり、霧のかかる中、ようやく今夜の宿である山荘が視野の片隅に入ったところで、大変な事態に直面してしまいました。冷たい雨が降り始めてとても寒くなり、疲労がピークに達していたこともあって、何人かの生徒と先生が動けなくなってしまったのです。登山が初めてだった私は、不安で青ざめました。

しかし、大学時代に登山の経験が豊富だった2人の先生が、この窮地を救ってくれました。2人がピストン輸送をするようにして動けなくなった人達をサポートし、山荘に運んでくれたのです。こうして全員が、標高3,080mにある山荘に何とか到着することができました。その山荘は大変混み合っており、人と人の肩が触れ合うような狭さの中で眠りに落ちました。しかし、真夜中にまた新たな

事件が発生しました。2人の生徒が高山病にかかり、発熱したのです。幸い、山岳医に来ていただき注射をしてもらおうと、2人とも快方に向かいました。

3日目の朝の4時。リーダーの先生から「雨が上がりました。日の出が見られそうです。行けそうな人は槍穂にアタックしましょう」と号令がかかりました。私も、せっかくなので参加しました。最初に、大小の岩がごろごろしている険しい岩場を、100m近く登りました。続いて、下を見ると直角に切れ落ちて見える岩場を、這うようにして進みました。最後には鎖場(くさりば)が現れました。一人ひとりが順番に鎖をつかみ、落ちて巻き添えを作らないように間隔を空けながら、覚悟を決めて登っていきました。リーダーの先生から「決して下を見るな」と言われ、一人ずつ必死に鎖にしがみつぎ、岩を抱えるようにして回り込んで、登り切りました。

頂上は、教室より少し狭い程度の広さでした。その地を、15人の生徒と先生は自らの足でしっかりと踏みしめました。そして、いよいよ日の出の時間を迎えました。地平線が黄金色に輝き始め、やはり黄金色に輝く雲が波のように山の稜線をゆっくりと乗り越えて、我々の方に押し寄せてきます。まさに息を呑む光景でした。あれ以上の日の出は、未だに見たことがありません。登った者にしかわからない、達成感に満ちた夏の素晴らしい思い出です。



以上が私の初めての登山体験です。初めて登るにしては、3,180mは少し高過ぎました…。

登山は人生に似ていると思います。我々人間はそれぞれの夢を持ち、目標を設定して、時には他人に助けをもらいながら、夢の実現を目指して歩み続けていきます。しかし残酷にも、時間は決して止まることはありません。人間は立ち止まっても、時間だけは刻々と過ぎていきます。時間を止めたり、過去に戻ったりすることは決してできません。勇気を出して、力強く、一歩ずつ前へと歩み続けていくしかないのです。

人生の頂は一色ではありません。十人十色。生徒の皆さん全員が、コロナなどには決して負けず、それぞれの人生という山の頂を目指して、力強く登っていくことを期待します。その山頂には、登頂した者にしか見られない、素晴らしい希望に満ちた景色がきっとあるはずですよ。